

移した最初の学者はボルバス Borbás (1881) であり、フィルコックス Philcox はこれを知らずに改名したものらしい。

8. エゾヒナノウスツボ

この種の最初の学名は *Scrophularia alata* A. Gray (1858-59) であるが、1781年にギリバート J. E. Gilibert がウクライナ産の植物に同名をつけているので、マクシモウィッチ C. J. Maximowicz は新たに *Scrophularia grayana* Maximowicz と命名した。ところが、ギリバートはすべての新種発表の際、現行の国際植物命名規約に則しない方法をとっているため無効名とされている。従って、はじめの学名が再び生きてくる。

以上をまとめると次の如くである。

- 1) *Belamcanda chinensis* (Linnaeus) De Candolle in Redouté, Liliac. 3: t. 121 (1805).
Ixia chinensis Linnaeus, Sp. Pl. 52 (1753).
- 2) *Phragmites australis* (Cavanilles) Trinius ex Steudel, Nomencl. Bot. ed. 2, 2: 324 (1841).
Arundo australis Cavanilles in Anal. Hist. Nat. (Madrid) 1: 100 (1799).
Phragmites communis Trinius, Fund. Agrost. 134 (1820).
- 3) *Tulotis fuscescens* (Linnaeus) Czerniaskowska in Add. & Corrig. ad "Fl. URSS" (t. I-XXX) 622 (1973), non Rafinesque ex Jackson (1895), nom. nud.
Orchis fuscescens Linnaeus, Sp. Pl. 943 (1753).
Tulotis asiatica Hara in Journ. Jap. Bot. 30: 72 (1955), pro nom. nov.
- 4) *Boehmeria gracilis* C. H. Wright in Journ.

Linn. Soc. Bot. 26: 485 (1899).

Boehmeria paraspicata Nakai, Rep. Veget. Mt. Apoi 17, 19 (1930), nom. nud.; Hara in Bot. Mag. Tokyo 48: 812 (1934), cum descr. brev.; Satake in Journ. Fac. Sci. Imp. Univ. Tokyo sect. 3, 4-6: 483 fig. 9-10 (1936).

- 5) *Lathyrus japonicus* Willdenow, Sp. Pl. 727 (1802).

Pisum maritimum Linnaeus, Sp. Pl. 727 (1753).

Lathyrus maritimus (Linnaeus) Fries, Fl. Scand. 106 (1835), non Bigelow (1824).

Orobis japonicus (Willdenow) Alefeld in Bonplandia 9: 143 (1861).

Lathyrus japonicus Willdenow subsp. *maritimus* (Linnaeus) P. W. Ball in Fedde, Repert. 79: 1-2: 45 (1968).

- 6) *Sophora flavescens* Solander in Aiton, Hort. Kew. 2: 43 (1789).

- 7) *Lindernia procumbens* (Krocker) Borbás, Békésm. Fl. 80 (1881); Philcox in Taxon 14-1: 30 (1965).

Lindernia pyxidaria Linnaeus, Mant. Alt. 252 (1771), nom. illegit.

Anagalloides procumbens Krocker, Fl. Silen. 2-1: 398 t. 26 (1790).

- 8) *Scrophularia alata* A. Gray in Mem. Amer. Acad. n. s. 6: 401 (1858-59), non Gilibert (1781), nom. illegit.

Scrophularia grayana Maximowicz ex Komarov in Act. Hort. Petr. 25: 416 (1907).

(横浜国立大学名誉教授)

長野県から報告されたササ類

鈴木 貞雄

S. Suzuki: Sasa group reported from Nagano Prefecture

長野県で発見され報告されたササ類は私がかぞえたところによると、21種2変種の多数にのぼる。それらが現在分類学的にどうなっているかということについては関心を持たれている方が少なくないと思われるので、以下それらについて申し述べたい。

1. ササ属 *Sasa* Makino et Shibata

1. オンタケザサ *S. megalogluma* Nakai 本種は1932年に中井猛之進博士が理科教育15巻72ページに裸名で発表され、その後1934年に植物研究雑誌10巻559

ページにラテン文をつけて正式に発表された。信濃国御岳(松村任三)とタイプ指定がなされた。私が東京大学にあるタイプ標本、御岳(松村: 1903, 8, 21)を研究したところによると、それはミヤコザサ*のもので、稈鞘に逆向の細毛があり、葉裏に軟毛がある

* ミヤコザサ節 sect. *Crassinodi* の特徴: 稈が低く、高さ1m以下で、枝を分岐しない。節間が長く、節は球状に膨出する。葉はうすく表面に光沢がない。表日本に分布する。

ことから、すでに発表されているニッコウザサ (ミヤマズ) *S. nana* Makino と全く同じものであり、そのシノニム (異名同品) となる。ニッコウザサの現在の学名は、*S. chartacea* Makino var. *nana* (Makino) S. Suzuki である。

2. チヨムラザサ *S. chiyomurensis* Nakai 本種は古瀬義氏によって下伊那郡千代村下村で採集され、それが杉本順一氏を経て東京大学に送られ、中井博士が植物研究雑誌11巻76ページ(1935)にミヤマコザサ節に属する新種として発表された。東京大学にあるタイプ標本(杉本, no. 1836, 10, 2, 1932)では稈鞘に開出した短毛が生え、節間に逆向の細毛があり、葉裏に軟毛があり、ニッコウザサとほとんど同じものである。それで私は植物学集報19巻 451 ページ (1967) でニッコウザサのシノニムとして処理した。

3. サクノミヤコザサ *S. muricata* Koidzumi 本種は1936年1月17日、平林氏が南佐久郡切原村湯ノ原で採集し、小泉源一博士によってミヤマコザサ節の新種として植物分類、地理5巻200ページ(1936)に発表された。私が京都大学にあるタイプ標本を研究した結果、ニッコウザサと異なるところがないので、植物学集報19巻 451 ページ (1967) でそのシノニムに落として処理した。

4. スワザサ *S. Ohwi* Koidzumi 本種は大井次三郎博士によって1935年8月1日に霧ヶ峰で採集され、小泉博士が植物分類、地理5巻201ページ(1936)にミヤコザサ節の新種として発表された。京都大学にあるタイプ標本では稈鞘と節間に逆向の細毛が密生し、節に長毛が密生し、葉鞘に毛がなく、葉の裏に軟毛がある。それはすでに発表されているミハルザサ *S. Hattoriana* Koidz. と同じもので、そのシノニムになる。ミハルザサはニッコウザサの節に長毛がでる型にすぎないので、私はヒコピア8巻(1977)でそれをニッコウザサの品種に落として学名を *S. chartacea* Makino var. *nana* (Makino) S. Suzuki f. *Hattoriana* (Koidz.) S. Suzuki に変更した。

5. オスワザサ *S. osuwasacrariocola* Koidz. 本種は杉本順一氏が諏訪郡中洲村諏訪神社上社で1936年9月11日に採集され、小泉博士によって植物分類、地理10巻259ページ(1941)にミヤコザサ節の新種として発表された。京都大学にあるタイプ標本の研究によると、稈鞘は開出した長毛と逆向の細毛が密に混生し、節間には逆向の細毛があり、葉鞘には上向の細毛があり、葉裏に軟毛が密生する。そのような形質はすでに発表されているアボイザサ *S. samaniana* Nakai と全く一致する。しかしオスワザサはそれより葉がずっと狭いので、私はアボイザサの品種に落とし、f. *osuwa-*

sacrariocola (Koidz.) S. Suzuki として植物学集報19巻448ページ(1967)に発表した。その後原産地で多くの個体について調査した結果、オスワザサはアボイザサの幼生型にすぎないことがわかったので、ヒコピア7巻105ページ(1975)でオスワザサをアボイザサのシノニムに落として処理した。

6. メクマイザサ *Bambusa senanensis* Franch. et Savat. var. *ontakensis* Franch. et Savat. 本変種の原因記載はきわめて簡単で特徴が全くわからない。また産地もあげられていない。しかし学名の上から御岳であろうと想像される。タイプ標本は Savatier の本国であるフランスにあるのでないかと思われるが、私はそれを見ていない。小泉博士(1930)はメクマイザサの属を変更して *Bambusa* から *Sasa* へ移し、かつ種に昇格させて *S. ontakensis* (Franch. et Savat.) Koidz. とされた。それは記載がないが、シノニムに *Arundinaria paniculata* var. *nana* Makino や *Sasa nana* Makino などをあげ、かつ和名はミヤマズとしているところから、それはミヤマコザサ節のニッコウザサのようである(私の研究によればミヤマズはニッコウザサと同じ)。つまり最初にあげたオンタケザサと同じものらしい。産地として日光、立山、御岳があげられている。

根本莞爾氏の日本植物総覧補遺(1936)ではメクマイザサの学名は *S. paniculata* Makino et Shibata var. *ontakensis* Camus となっており、クマイザサ(チマキザサ節*)の変種で、葉裏が無毛と書かれている。そうするとニッコウザサとは全く別なもので、チマキザサ節のルベンベザサ *S. palmata* var. *Niijimai* (Tatewaki ex Nakai) S. Suzuki がこれと似ている。要するにメクマイザサの正体は今のところ不明である。

7. シナノザサ *S. senanensis* (Franch. et Savat.) Rehder 本種ははじめ Savatier が御岳で採集した標本にもとづいて Franchet et Savatier の *Enumeratio Plantarum Japonicarum* 2巻182ページ(1876)に *Bambusa senanensis* Franch. et Savat. として発表された。のちに Rehder (1919) によって *Sasa* 属へ移されて上記の学名となった。

シナノザサはクマイザサ *S. paniculata* (Fr. Schmidt) Makino et Shibata と同じものであることがあとでわかった。その場合、学名は *S. senanensis* を使用し、*S. paniculata* は用いられない。それはどうしてかという、クマイザサははじめ *Arundinaria*

* チマキザサ節 sect. *Sasa* の特徴: 稈は高さが2m内外となり、基部でまばらに枝を分岐する。葉はやや厚く紙皮質で表面に光沢がある。主として裏日本に産する。

kurilensis var. *paniculata* Fr. Schmidt (1968) と命名され、*senanensis* の1879年より早く発表されて、一見 *paniculata* の方に先取権があるように見えるが、*paniculata* は変種の段階で先取権があるのであって、種の段階となると *senanensis* の方に先取権があるからである。シナノザサはチマキザサ節に属し、稈の各部に毛がなく、葉裏に軟毛があるのが特徴である。

8. ケグキタカヤマザサ *S. pubiculmis* Koidzumi
本種は星大吉氏が1942年11月23日に下高井郡平穂村浜で採集し、小泉博士によって植物分類、地理 12巻114ページ (1943) にチマキザサ節の新種として発表された。京都大学にあるタイプ標本を検したところ、それはシナノザサ (クマイザサ) に似て、葉がそれよりもっと広く、節間に逆向毛があり、シナノザサの変種であるミナカミザサ *S. senanensis* Rehder var. *Harai* (Nakai) S. Suzuki と異なるところがないので、私は植物学集報19巻116ページ (1965) でミナカミザサのシノニムに落として整理した。

9. タンカツチマキザサ *S. inexpectans* Koidzumi
本種は池上義信氏が1943年8月12日に野尻湖畔で採集され、また山田泰助氏が1936年12月6日に下高井郡中村稲荷で採集され、小泉博士によって植物分類、地理 12巻166ページ (1943) にチマキザサ節の新種として発表された。池上・山田両氏の標本では稈の各部に毛がなく、葉は広く卵状長楕円形で裏面に軟毛が密生する。それはすでに発表されているオタカチマキ *S. uyetsuensis* Koidz. (1940) と同じである。私は植物学集報19巻116ページ (1965) でオタカチマキをミナカミザサの品種に格下げし、*S. senanensis* var. *Harai* f. *uyetsuensis* (Koidz.) S. Suzuki と改めた。オタカチマキは節間に毛がなく、ミナカミザサは節間に逆向毛がある。しかし節間の毛の有無は個体変異であることがわかったので、私はさらにヒコピア7巻99ページ (1975) でオタカチマキをミナカミザサ *S. senanensis* var. *Harai* (Nakai) S. Suzuki のシノニムに落とした。つまりタンカツチマキザサはミナカミザサと同じものである。

10. ジゴクザサ *S. budhistica* Koidzumi 本種は小泉博士が1936年8月13日に下高井郡平穂村浜湯地獄谷で採集し、植物分類、地理 6巻71ページ (1937) にチマキザサ節の新種として発表された。京都大学にあるタイプ標本では稈節に開出した長毛が散生し、葉は裏面に軟毛が密生していて、その点オオバザサ *S. megalophylla* Makino et Uchida と同じであるが、ただジゴクザサでは葉表に長毛が散生している。しかし葉表の毛は個体変異にすぎない。それで私は植物学集報19巻424ページ (1967) でジゴクザサをオオバザサのシ

ノニムに落として整理した。

11. ナガバノウツクシザサ *S. longifolia* Koidzumi
本種は望月精一氏が1939年11月13日に飯田市鉾立と大平峠の間で採集し、小泉博士によって植物分類、地理 9巻79ページ (1940) にチマキザサ節の新種として発表された。京都大学にあるタイプ標本では稈の各部に毛がなく、葉はやや狭い披針状長楕円形で裏面に軟毛がある。それはシナノザサ (クマイザサ) の葉のやや狭い型にすぎないので、私は植物学集報19巻111ページ (1965) でシナノザサのシノニムに落として整理した。

12. ナガバミヤコザサ *S. bellatula* Koidzumi とフシゲナガバミヤコザサ var. *lasionodosa* Koidzumi
本種および本変種はともに小泉博士が1936年8月22日に木曾読書村摺古木山で採集し、植物分類、地理 8巻56ページ (1939) にミヤコザサ節の新種および新変種として発表された。京都大学にあるタイプ標本を見ると、それらはミヤコザサ節のものでなく、チマキザサ節の發育のわるいもので、ナガバミヤコザサは稈の各部に毛がなく、葉裏に軟毛があることからシナノザサであり、フシゲナガバミヤコザサはそれと同じで、節に長毛があることからフシゲクマイザサ *S. senanensis* f. *hispidula* (Tatewaki) S. Suzuki である。私は植物学集報19巻111ページおよび114ページ (1965) でナガバミヤコザサをシナノザサのシノニムに、またフシゲナガバミヤコザサをフシゲクマイザサのシノニムにそれぞれ落として整理した。

13. イナコスズ *S. Motidsukiana* Koidzumi 本種は望月精一氏が1939年12月3日に下伊那郡泰阜村唐松と同年10月11日に同郡千代村下村で採集し、小泉博士が植物分類、地理11巻4ページ (1942) にササ属スズモドキ節の新種として発表され、のちにコスズモドキ節に移された。京都大学にある上記2個所の標本を見ると、稈は高さが25~30 cm、直径1.5 mm ほどの小形のもので、稈節と葉鞘は無毛、節間に逆向の細毛があり、節に長毛がある。葉は枝の先に3~4枚つき、裏面に軟毛が密生する。それはすでに発表されているケバノカシダザサ *S. kashidensis* Makino et Koidz. var. *pubifolia* Koidz. とほとんど同じものである。中井博士 (1931) はササ属のなかでナンブスズの類に対してナンブスズ節* sect. *Lasioderma* を設立し、小泉博士はそれによく似た群についてスズモドキ節 sect. *Pseudosasamorpha* (1939) およびコスズモドキ節 sect. *Nanopseudosasamorpha* (1942) の2つの節

* ナンブスズ節 (狭義) の特徴: 稈は高さ1~2 m、上部で枝を分岐する。稈節は節間とはほぼ同長、またはすこし短い。枝がでるとき主稈の稈節は枝の基部を包む。

を設立した。ケバノカシダザサはコスズモドキ節に属する。私の所見ではスズモドキ節はナンブスズ節のやや小形化したもの、とくに葉がすこし狭くなったものにすぎず、またコスズモドキ節はそれが一層矮小化したものにすぎない。そしてそれらは中間形で密に連続しているので、私はこれらの群をナンブスズ節1つにしぼり、スズモドキ節とコスズモドキ節を認めず、ただコスズモドキ節型のものを亜種の段階で区別することになっている。

ケバノカシダザサはツクパナンブスズ *S. tsukubensis* Nakai (ナンブスズ節) の矮小化したもの、つまりコスズモドキ型のものなので、私はヒコビア8巻(1977)で前者を後者の亜種に移して、学名を *S. tsukubensis* subsp. *pubifolia* (Koidz.) S. Suzuki に変更した。イナコスズはケバノカシダザサのシノニムである。

14. サイヨウイナコスズ *S. tenryuensis* Koidzumi 本種は小泉博士によって植物分類、地理11巻317ページ(1942)にコスズモドキ節の新種として発表された。産地は下伊那郡千代村下村となっているだけで採集者名や日付がつけてない。原記載の上ではイナコスズと全く区別ができない。京都大学でタイプ標本をさがしたが見当たらなかった。サイヨウイナコスズのカバーのなかに原記載の産地である下伊那郡千代村下村で小泉博士が1942年11月に採集された標本があるが、発表誌の日付は1942年9月30日なので、その標本はタイプではない。しかもその標本は原記載に反して葉鞘に細毛が密生している。それはケバノカシダザサの変種、アシカガコスズ *S. tsukubensis* subsp. *pubifolia* var. *ashikagaensis* S. Suzuki である。それとは別にイナコスズのカバーのなかに千代村下村で望月精一氏が1939年10月11日に採集した標本があり、発表誌の日付より前なのでサイヨウイナコスズのタイプと見れないこともないが、ラベルにイナコスズとなっているため lectotype (後定規準標本) とするにははなはだ抵抗を感じる。結局、私は原記載を信頼して、サイヨウイナコスズはイナコスズと同じもの、すなわちケバノカシダザサであると考えている。

15. シモイナコスズ *S. tenryuriparia* Koidzumi 本種は望月精一氏が1939年11月13日に下伊那郡千代村駅南方で採集し、小泉博士が植物分類、地理11巻318ページ(1942)にコスズモドキ節の新種として発表された。京都大学にあるタイプ標本では稈は高さ50~60 cm、直径1~2 mm で小さく、稈鞘は長毛が疎生し、節間と葉鞘は無毛、葉の裏に短毛が密生する。それはすでに発表されているカシダザサ *S. kashidensis* Makino et Koidz. (1934) と同じものである。カシダザ

サはハコネナンブスズ *S. Shimidzuana* Makino (ナンブスズ節) の矮小化、すなわちコスズモドキ型なので、私はヒコビア8巻(1977)でその亜種に格下げして学名を *S. Shimidzuana* subsp. *kashidensis* (Makino et Koidz.) S. Suzuki に変更した。

II. アズマザサ属 *Sasaella* Makino

16. シナノコザサ *S. Sugimotoi* (Nakai) Nakai ex Koidz. 本種は杉本順一氏が1932年10月に下伊那郡大下条村で採集され、中井博士によって *Arundinaria Sugimotoi* Nakai, sp. nov. として植物研究雑誌10巻747ページ(1934)に発表された。のちに小泉博士(1941)によって *Sasaella* 属へ移された。東京大学にあるタイプ標本では稈鞘と葉鞘は無毛、節間に逆向の細毛があり、葉の裏に毛がある。それはアズマザサ *S. ramosa* (Makino) Makino と同じである。ただしアズマザサの正型では節間に毛がない。節間の毛の有無は個体変異に属することなので問題ではない。私は植物研究雑誌51巻153ページ(1976)でシナノコザサをアズマザサのシノニムに落として整理した。

17. キソシノ *S. kisoensis* Koidzumi 本種は小泉博士が1936年8月17日に西筑摩郡木曾福島町兎野で採集し、植物分類、地理8巻192ページ(1939)に新種として記載された。京都大学にあるタイプ標本では、稈の各部に毛がなく、葉裏に毛があって、それはアズマザサとほとんど同じものである。小泉博士は原記載のなかで本種をアズマザサと比較して、葉は披針形で先が漸次とがり、基部は鈍形で区別できるとしているが、もともとアズマザサの葉形は変異に富み多型的で、その程度のちがいで種を区別するのは全く意味がない。私は植物研究雑誌51巻153ページ(1976)でキソシノをアズマザサのシノニムに落として整理した。

18. トヨムラザサ *S. toyomurensis* (Nakai) Nakai ex Koidz. 本種は古瀬昌弘氏が1932年9月29日に下伊那郡豊村で採集し、杉本順一氏を経て東京大学に送られ、中井博士が植物研究雑誌10巻748ページ(1934)に *Arundinaria toyomurensis* Nakai, sp. nov. として発表された。のちに小泉博士(1941)によって *Sasaella* 属へ移された。東京大学に holotype、国立科学博物館に isotype がある。それらのタイプ標本によると、稈の各部に毛がなく、葉裏に毛があり、アズマザサと全く同じものである。私は植物研究雑誌51巻153ページ(1976)でトヨムラザサをアズマザサのシノニムに落として整理した。

19. トミクサザサ *S. tomikusensis* (Nakai) Nakai ex Koidzumi 本種は杉本順一氏が1932年10月に下伊那郡富草村で採集され、中井博士によって植物研究雑誌

10巻744ページ (1934) に *Arundinaria tomikusensis* Nakai, sp. nov. として発表された。のちに小泉博士 (1941) によって *Sasaella* 属へ移された。東京大学にあるタイプ標本では、節を除いて稈の各部に毛がなく、葉裏に毛がある。節に短毛が密生する。すなわちアズマザサと同じだが、節に短毛がある点がわずかにちがっているにすぎない。それで私はトミクサザサをアズマザサの品種に格下げして *S. ramosa* (Makino) Makino f. *tomikusensis* (Nakai) S. Suzuki として植物研究雑誌51巻155ページ (1976) に発表した。

20. サイジョシノ *S. shinanoana* (Koidz.) Koidz. 本種は小泉博士が1936年8月11日に川中島八幡原と同年8月12日に埴科郡妻女山で採集した標本にもとづいて植物分類, 地理 6巻 67 ページ (1937) に *Arundinaria shinanoana* Koidz. n. sp. として発表され、その後1941年に *Sasaella* 属へ移された。京都大学にあるこれら2個所からの標本はほとんど同じものである。私は和名の関係上、妻女山の標本を lectotype (後定規準標本) に選定した。タイプ標本では稈鞘に長毛がやや密生し、上方の葉鞘は無毛であるが、下方のものには長毛がある。節と節間には毛がない。葉の裏には短毛が密生する。それは1934年にすでに発表されているアタミシノ *Arundinaria atamiana* Nakai = *Sasaella atamiana* (Nakai) S. Suzuki と同じなので、私は植物研究雑誌51巻 272 ページ (1976) にサイジョザサをアタミシノのシノニムに落として整理した。

Ⅲ. メダケ属 *Pleioblastus* Nakai

21. ウスイザサ *P. usuiensis* Nakai 本種は原寛博士が1932年4月1日に碓氷峠で採集され、中井博士が植物研究雑誌11巻7ページ (1935) に新種として発表された。東京大学にあるタイプ標本は冬を越した個体で特徴がほとんど消失していてタイプとしてははなはだ不適当な標本である。碓氷峠熊の平で原博士が1934年5月24日に採集された標本があるが、それは新しい枝がでていて、ほぼ完全に近いものと思われるので、それとタイプ標本の両方からウスイザサの特徴を追求すると、稈鞘は毛がなく、葉鞘に逆向の細毛と開出する長毛が混生している。葉は裏の半側に細毛がある。それは早くも1896年に発表されたトヨオカザサ *Arundinaria humilis* Mitford = *Pleioblastus humilis* (Mitford) Nakai とほとんど同じものである。

22. ヤスオカザサ *P. yasukensis* Nakai 本種は杉本順一氏が1932年10月に下伊那郡泰阜村で採集され、中井博士によって植物研究雑誌11巻9ページ (1935) に新種として発表された。東京大学にあるタイプ標本では、稈鞘と節間に逆向の微細毛が密生し、節は無毛、葉鞘に微細毛がうすくある。葉は両面ともほとんど

無毛である。それはヒロウザサ *P. nagashima* (Mitford) Nakai によく似ているが、ヒロウザサは節に長毛が密生しているのに対してヤスオカザサは節に毛がないことだけがわずかにちがっている。それで私はヒコビア 8巻 (1977) でヤスオカザサをヒロウザサの品種に格下げして *P. nagashima* f. *yasukensis* (Nakai) S. Suzuki と学名を変更した。

上に述べたように長野県から報告された21種2変種のササ類のうち、種として残るものはシナノザサ (クマイザサ) *Sasa senanensis* (Franch. et Savat.) Rehder の1種だけ、品種としてはトミクサザサ *Sasaella ramosa* (Makino) Makino f. *tomikusensis* (Nakai) S. Suzuki とヤスオカザサ *Pleioblastus nagashima* (Mitf.) Nakai f. *yasukensis* (Nakai) S. Suzuki の2品種がある。メクマイザサ *Bambusa senanensis* Franch. et Savat. var. *ontakensis* Franch. et Savat. が保留になったほか、残りの18種1変種はそれぞれほかの種類のシノニムとなって統合されることになる。

引用文献

- Franchet, A. & Savatier, L. (1879): *Enumeratio Plantarum Japonicarum* 2: 606.
Freeman Mitford, A.B. (1896): *The bamboo garden* 87-103.
Koidzumi, G. (1930): *Florae Symbolae Orientali-Asiaticae* 38.
——— (1934-1943): *Bambusaceae novae japonicae*. *Acta Phytotax. Geobot.* 3, 5, 6, 10-12.
——— (1935-1943) *Contribuciones ad Cognitionem Florae Asiae Orientalis*. *Ibid.* 4, 8, 9, 12.
——— (1941): *Combinaciones novae nominum specierum generis Sasaellae*. *Ibid.* 10: 296-298.
——— (1942): *Sasa* sect. *Nanopseudosamomorpha* Koidzumi, nov. sect. *Ibid.* 11: 115.
Makino, T. (1929): *A contribution to the knowledge of the flora of Japan*. *Journ. Jap. Bot.* 2: 15-16, 6: 12-24.
Makino, T. & Shibata, K. (1901): *On Sasa, a new genus of Bambuseae, and its affinities*. *Bot. Mag. Tokyo* 15: 18-31.
Nakai, T. (1925): *Two new genera of Bambusaceae, with special remarks on the related genera growing in eastern Asia*. *Journ. Arn. Arb.* 6: 145.
——— (1931): *Gramineae-Bambuseae in Miya-*

be & Kudo, Flora of Hokkaido and Saghalien II. Journ. Fac. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 26: 180-195.

—— (1932): 理科教育 15: 72

—— (1933): Bambusaceae in Japan proper (4). Journ. Jap. Bot. 9: 215-240.

—— (1934-1935): Novitates Bambusacearum in Imperio Japonico recentissime detectae. Ibid. 10, 11.

根本莞爾 (1936): 日本植物総覧補遺 891.

Rehder, A. (1919): New species, varieties and combinations from the herbarium and the collections of the Arnold Arboretum, Gramineae. Journ. Arn. Arb. 1: 58-59.

Schmidt, F. (1868): Reisen im Amur-lande und auf der Insel Sachalin. Mem. Acad. Imp. Sci. St.-Petersb. 7 sér. 12: 198.

Suzuki, S. (1967): Taxonomical studies of the Bambusaceous genus Sasa Makino et Shibata II, III. Jap. Journ. Bot. 19: 99-125, 419-457.

—— (1975): A revision of the Bambusaceous Sasa Makino et Shibata. Hikobia 7: 95-110.

—— (1976): A revision of the genus Sasaella Makino (Bambusaceae) 2, 4. Journ. Jap. Bot. 51: 151-158, 269-277.

—— (1977): New taxa and nomenclatural changes in Bambusaceae. Hikobia 8.

(前玉川大学教授)

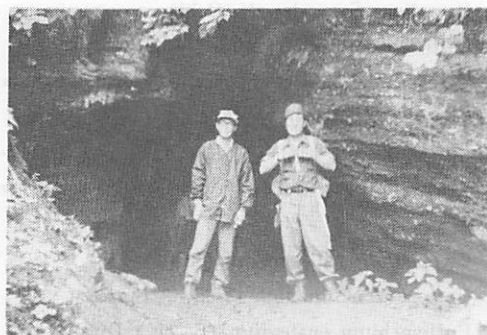
日本北端石灰岩地の藓類フロラ

高 木 典 雄

N. Takaki: Moss flora of the calcareous area in the northernmost part of Japan

日本各地の藓類フロラは多くの研究者によって最近とみに明らかにされつつあるが、その中で特に石灰岩地フロラについても、かなりの報告が出されている。筆者は1966年8月16日、北海道宗谷支庁、枝幸郡、中屯別町を訪れ、同地の旭台にある石灰岩地を調査することが出来た。日本の石灰岩地としてはおそらく最北、又はそれに近い位置にあると考えられる。生態的な詳細なデータをとることは時間的に出来なかったが、日本各地の石灰岩地フロラを比較する上に於て、ここは最北の一地点として記録すべき地域と考えられるので、採集品を整理して報告することとした。

当地は日本の最北端宗谷岬の東南、直線距離にして約70 kmの地点にある。海拔約100 m。鍾乳洞が4ヶ所ほどあり、内部には柱状又は波紋状の鍾乳石が垂れ下っており、洞奥には池や滝もあって変化に富んでいる。当地の石灰岩は新第三紀の主として貝化石の集積によって出来たもので、Ostrea, Peeten等の貝化石を含んでいる。固結状態はルーズで、したがって風化崩壊も速い。鍾乳洞の近くにある軍艦岩と称する軍艦そっくりの形をした巨岩は貝殻の密集堆積したもので、その岩隙を埋めるようにして藓類が生育している。軍艦岩には、クジャクシダ、イワデンダ、クモノスダ、コタニワタリ、ツルデンダ、ウサギシダ、オウレンシダ等のシダ植物も岩隙に生育している。同地には又、帆立岩(一名親子岩)と称する岩地もある。



中屯別石灰岩地の鍾乳洞

で、ここにも藓類の生育がみられる。

北海道における石灰岩地の藓類フロラについて、今までに報告されているものは非常に少い。北海道のほとんど中央に位置する石狩国、空知郡、東山村西達布の石灰地について齊藤(1956)¹⁾の報告があり、又、野口(1962)²⁾はアボイ岳蛇紋岩地の藓類を報告するに当って、その一部としてアボイ岳のすぐ近くにあるエサマンベツの石灰岩地(海拔250~280 m)の採品35種を記録し、蛇紋岩地と石灰岩地との藓類フロラを比較している。

中屯別石灰岩地の藓類

(△上記野口の報告と共通する種)
(*上記齊藤の報告と共通する種)

△* Anomodon longifolius (Brid.) Hartm.

△* Aulacomnium heterostichum (Hedw.) B.S.G.